

Studio/Robot v21.10 バージョンアップガイド

2022年3月

UiPath 株式会社



This presentation may include forward-looking statements. Forward looking statements include all statements that are not historical facts, and in some cases, can be identified by terms such as “anticipate,” “believe,” “estimate,” “expect,” “intend,” “may,” “might,” “plan,” “project,” “will,” “would,” “should,” “could,” “can,” “predict,” “potential,” “continue,” or the negative of these terms, and similar expressions that concern our expectations, strategy, plans or intentions. By their nature, these statements are subject to numerous risks and uncertainties, including factors beyond our control, that could cause actual results, performance or achievement to differ materially and adversely from those anticipated or implied in the statements. Although our management believes that the expectations reflected in our statements are reasonable, we cannot guarantee that the future results, levels of activity, performance or events and circumstances described in the forward-looking statements will be achieved or occur. Recipients are cautioned not to place undue reliance on these forward-looking statements, which speak only as of the date such statements are made and should not be construed as statements of fact.

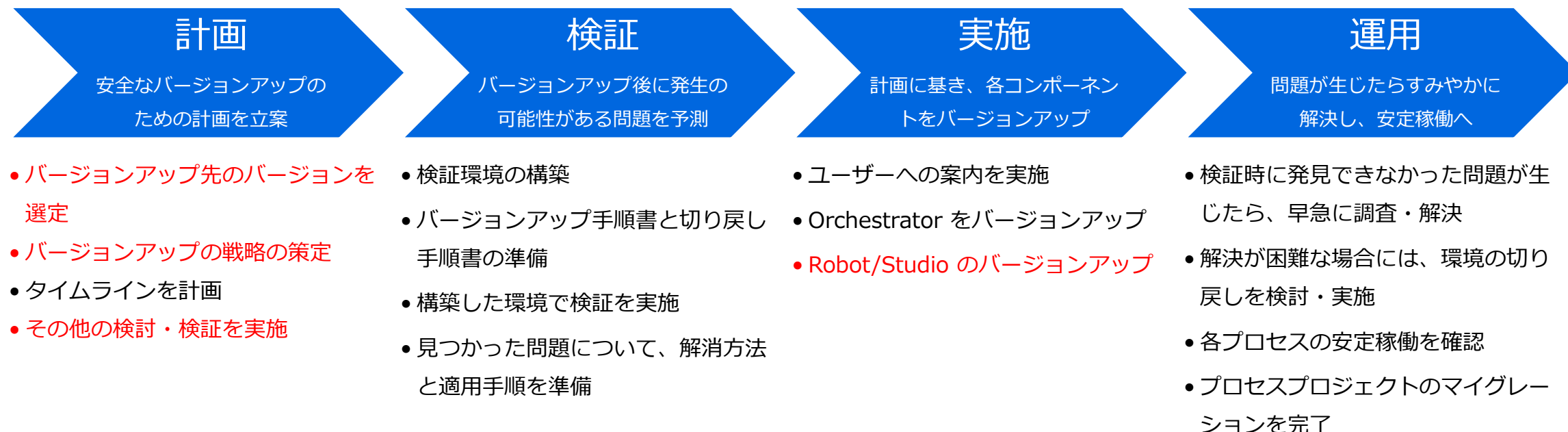
This meeting is strictly confidential. By participating in this meeting, you agree to keep any information we provide confidential and not to disclose any of the information to any other parties without our prior express written permission. Neither the information contained in this presentation, nor any further information made available by us or any of our affiliates or employees, directors, representatives, officers, agents or advisers in connection with this presentation will form the basis of or be construed as a contract or any other legal obligation.

このプレゼンテーションには、将来の見通しに関する記述が含まれている場合があります。将来の見通しに関する記述は、過去又は現在の事実以外のすべての記述を含み、場合によっては、「予期する」、「考える」、「推定する」、「予測する」、「意図する」、「場合がある」、「可能性がある」、「計画する」、「企画する」、「予定である」、「方針である」、「すべきである」、「あり得る」、「なり得る」、「予見する」、「見込みがある」、「継続する」又はこれらの用語の否定表現及び当社の予測、戦略、計画又は意図に関する類似表現によって識別されることがあります。その性質上、これらの記述は、多数のリスク及び不確実性（当社が制御できない要因を含みます。）にさらされており、実際の業績、経営結果又は達成状況は、記述において予期又は暗示された内容と大きく且つ不利に異なる可能性があります。当社の経営陣は、当社の記述に反映されている予測内容は合理的であると考えておりますが、将来の見通しに関する記述に記載されている将来の業績、活動、経営結果又は出来事のレベル及び状況が達成される又は発生することを保証することはできません。かかる将来の見通しに関する記述は、当該記述が行われた日付現在のものであり、事実に関する事項と解釈されてはならず、受領者は、当該記述に過度に依存しないようご注意ください。

この会議は極秘となります。本会議に参加することにより、貴殿は、当社が提供する一切の情報の機密性を保つこと及び当社の書面による事前の明示的な許可を得ずにいかなる当該情報も他のいかなる当事者にも開示しないことに同意するものとします。このプレゼンテーションに含まれる情報又はこのプレゼンテーションに関連して当社若しくは当社の関連会社若しくは従業員、取締役、代表者、役員、代理人若しくはアドバイザーが提供するあらゆる追加情報はいずれも、契約又はその他法的義務の基礎を形成するものではなく、また、契約又はその他法的義務として解釈されるものではありません。

バージョンアップ作業のマイルストーン

本資料は、下記の赤字部分を説明します。各マイルストーンのステップは必要に応じて並行に進めます。ただし、計画と検証が完了してから実施と運用に入ることを強く推奨します。



※ 各マイルストーンに必要な期間は、プロジェクトの規模などの条件によって異なります。

- バージョンアップ先のバージョンを選定
- バージョンアップの戦略を策定
- Robot/Studio のバージョンアップ
- その他の検討・検証を実施
- 補足: Robot/Studio の安全なバージョンアップについて

※ Orchestrator のバージョンアップについては、下記を参照して下さい。

Orchestrator バージョンアップガイド

<https://www.uipath.com/ja/resources/knowledge-base/uipath-orchestrator-version-up-guide>

バージョンアップ先の バージョンを選定

- 製品バージョンの選定
- UiPath 製品のサポートモデル
- システム要件の確認



製品バージョンの選定

下記情報を踏まえ、プロジェクト要件にあった製品バージョンを選択します

確認対象	確認ポイント	例と説明
バージョンアップの動機	業務要件	<ul style="list-style-type: none">例: ガバナンス・監査機能の強化 (Orchestrator)例: デバッグ機能の強化 (Studio)
	システム要件	<ul style="list-style-type: none">例: ログ出力キャパシティの強化 (Orchestrator)
各バージョンのサポートモデル	プロダクトサポート終了日	(続くページで説明)
各バージョンのリリースノート	互換性マトリックス	(続くページで説明)
	新機能	導入のメリットと併せて、その副作用、運用手順やロール設定への影響等も評価
	既知の問題	自動化対象のアプリケーションや、既存プロセスで使用中のアクティビティへの影響を評価
各バージョンのユーザーガイド	ハードウェア要件	(続くページで説明)
	ソフトウェア要件	

UiPath 製品のサポートモデル

UiPath 製品のリリース頻度とサポートモデルを考慮してバージョンを選択します。

- サポートモデルは以下の2つ。最新情報は脚注参照※1
 - FTS (Fast Term Support) – 毎年4月頃にリリース。最新機能を提供。
 - LTS (Long Track Support) – 毎年10月頃にリリース。安定した動作と長いサポート期間が特徴。
- 最新の LTS 版が、バージョンアップ先の有力な選択肢となります
- サポート切れのバージョンにバージョンアップすることは避けて下さい

※1 プロダクトライフサイクル: <https://docs.uipath.com/overview-guide/lang-ja/docs/product-lifecycle>

システム要件の確認

選択するバージョンの、ハードウェア要件、ソフトウェア要件を確認して下さい。
要件を満たさない環境での利用は、公式サポート対象外となります。

- バージョンアップの前後で、製品の要件が変化している場合があります。
- バージョン選定時に、既存マシンのスペックも考慮して下さい。

ハードウェア要件	ソフトウェア要件
<ul style="list-style-type: none">• CPU のコア数とビットネス• RAM• ディスク領域	<ul style="list-style-type: none">• OS のバージョンとビットネス• .NET Framework のバージョン• その他、自動化可能なブラウザーや Citrix 環境などについて

詳細は下記をご参照下さい。

ハードウェアおよびソフトウェアの要件 (Studio)

<https://docs.uipath.com/installation-and-upgrade/lang-ja/docs/studio-hardware-and-software-requirements>

Orchestrator バージョンアップガイド

<https://www.uipath.com/ja/resources/knowledge-base/uipath-orchestrator-version-up-guide>

バージョンアップの 戦略を策定

- 互換性マトリックス
- バージョンアップの経路
- Orchestrator の Studio/Robot の組み合わせ
- Studio と Robot の組み合わせ



互換性マトリックス

Studio/Robot と Orchestrator の組み合わせ可能なバージョンを考慮して下さい。

- 同じ Orchestrator に複数バージョンの Studio/Robot を同時に接続しても問題はないが、全てを同じバージョンに揃えることが推奨される
- 同じ端末に、違うバージョンの Studio と Robot をインストールすることはできない
- Robot と Studio を別の端末にインストールする場合は、それらを同じバージョンとする必要はない。ただし、Robot のバージョンは Studio と同じか新しくする必要がある（後述）
- 最新の互換性マトリックスは、下記を参照
<https://docs.uipath.com/overview-guide/lang-ja/docs/product-lifecycle>

製品バージョン	Orchestrator 2021.10.x	Orchestrator 2021.4.x	Orchestrator 2020.10.x	Orchestrator 2019.10.x	Orchestrator 2018.4.x
Robot and Studio 2021.10.x	✓ 10, 11	✓	✓	✓	×
Robot and Studio 2021.4.x	✓	✓	✓	✓	×
Robot and Studio 2020.10.x	✓	✓	✓	✓	×
Robot and Studio 2019.10.x	✓ 2, 3	✓ 2, 3	✓ 2, 3	✓	✓
Robot and Studio 2018.4.x	✓ 2, 3, 4, 5	✓ 2, 3, 4, 5	✓ 2, 3, 4, 5	✓ 4, 6	✓ 6

バージョンアップの経路

Orchestrator と Robot について、現在使用中のバージョンアップとバージョンアップ後のバージョンを確認し、どのような経路でバージョンアップすべきかを検討します。

- 一般に、安全なバージョンアップの順序は Orchestrator → Robot → Studio となる。これは、バージョンアップ作業中に未サポートの組み合わせ **×** を経由しないようにするため。
- 右表の **×** を経由しない経路となっていれば、必ずしも上記の順でバージョンアップする必要はない。
- すべての Robot/Studio 端末を、同時にバージョンアップする必要はない。単一の Orchestrator に、複数バージョンの Robot/Studio を接続可能であるため。
- 別端末の Robot と Studio については、前述の通り先に Robot をバージョンアップする必要がある。

製品バージョン	Orchestrator 2021.10.x	Orchestrator 2021.4.x	Orchestrator 2020.10.x	Orchestrator 2019.10.x	Orchestrator 2018.4.x
Robot and Studio 2021.10.x	✓ 10, 11	✓	✓	✓	×
Robot and Studio 2021.4.x	✓	✓	✓	✓	×
Robot and Studio 2020.10.x	✓	✓	✓	✓	×
Robot and Studio 2019.10.x	✓ 2, 3	✓ 2, 3	✓ 2, 3	✓	✓
Robot and Studio 2018.4.x	✓ 2, 3, 4, 5	✓ 2, 3, 4, 5	✓ 2, 3, 4, 5	✓ 4, 6	✓ 6

OC/RT/ST をすべて同時にバージョンアップ

OC をバージョンアップしてから、RT/ST を段階的にバージョンアップ

Orchestrator と Studio/Robot の組み合わせ

利用可能になるバージョンの新機能は、Orchestrator と Studio/Robot のバージョンの組み合わせに依存します。
必要な機能が利用可能となるように、バージョンアップを計画して下さい。

組み合わせによる制限		Orchestrator	
		旧バージョン	最新バージョン
Studio/Robot	旧バージョン	新機能はご利用頂けません。	Studio/Robot のバージョンに依存しない Orchestrator の新機能のみが利用可能となります。
	最新バージョン	Orchestrator のバージョンに依存しない Studio/Robot の新機能のみが利用可能となります。	最新バージョンのすべての機能が利用可能となります。

- 各バージョンの具体的な組み合わせについては、Orchestratorバージョンアップガイドをご参照下さい。
<https://www.uipath.com/ja/resources/knowledge-base/uipath-orchestrator-version-up-guide>

Robot/Studio のバージョンアップ

- バージョンアップ方法の選択
- バージョンアップ時の注意
- 複数のマシンをバージョンアップするとき
- バージョンアップを切り戻す手順



バージョンアップ方法の選択

Studio/Robot をインストールする方法には、いくつかの選択肢があります。

選択肢	概要	メリット	デメリット
手動で インストーラを実行	インストーラを起動して バージョンアップ	<ul style="list-style-type: none">インストーラがあればよく、何らの前準備が不要インストールオプションを画面上で確認しながらバージョンアップ可能	<ul style="list-style-type: none">インストール時のオプションを、マシンごとに指定する必要
バッチファイルで インストーラを サイレント実行	インストーラを サイレント実行する バッチファイルを準備	<ul style="list-style-type: none">インストール時/インストール後の環境設定の手間が不要インストール/バージョンアップ手順の案内が容易	<ul style="list-style-type: none">インストーラのコマンドラインオプションの確認と、バッチファイルの作成が必要
Orchestrator の 自動更新機能で バージョンアップ	Orchestrator の機能により 接続されているStudio/Robot を 自動でバージョンアップ	<ul style="list-style-type: none">運用中の Studio/Robot マシンの台数が多いとき、このバージョンアップの手間を大幅に削減	<ul style="list-style-type: none">既に Studio/Robot 21.10 以降がインストールされている必要あり対象マシンが、Orchestrator 21.10 以降に接続されている必要あり

バージョンアップ時の注意

既存 Studio/Robot をアンインストールせず、そのまま新バージョンのインストーラを実行してください。

注意点

- 既存の Studio/Robot をアンインストールせず、そのまま新しいバージョンのインストーラを実行してバージョンアップして下さい。
- 適宜設定ファイルをバックアップして下さい。また、バージョンアップ後に設定内容が失われているかご確認下さい。特に何らかの設定を変更している場合には、変更内容が引き継がれている事を確認して下さい。

※ Studio/Robot をアンインストールした場合に起きる事

- ローカルでアクティベーションしたライセンスは、ディアクティベーションされます。
- 以前のバージョンに同梱のアクティビティパッケージが、ローカルのライブラリフィードから削除されます
- ユーザーが作成したプロセスパッケージは、ローカルのプロセスフィードから削除されます。
上記のほか、構成済みの設定が失われる場合があります。

複数のマシンをバージョンアップするとき

新バージョンの Studio で作成・編集した自動化プロセスを、旧バージョンの Robot で実行することはサポートされません。そのため、複数台の Studio/Robot をバージョンアップするときは、Robot からバージョンアップすると安全です。

自動化プロセスを作成・編集した Studio バージョンと、
自動化プロセスを実行する Robot バージョンについて

- Studio バージョン \leq Robot バージョン
→ サポート対象
- Studio バージョン $>$ Robot バージョン
→ サポート対象外

※ 上記については、このページの最下部をご覧ください。

<https://docs.uipath.com/overview-guide/lang-ja/docs/compatibility-matrix>

※ なお、ひとつのマシンに違うバージョンの Studio と Robot をインストールすることはできません。

バージョンアップを切り戻す手順

万が一、バージョンアップ後に既存のプロセスが動作しなくなった場合には、必要に応じてバージョンの切り戻しを実施して下さい。

1. ローカルのライブラリフィードにある .nupkg ファイルをバックアップ
 <InstallDir>%Studio%Packages
2. ローカルのプロセスフィードにある .nupkg ファイルをバックアップ
 C:%ProgramData%UiPath%Packages
3. 設定を変更していれば、その内容をバックアップ
4. 新しいバージョンの製品をアンインストール
5. 以前のバージョンの製品をインストール
6. ライセンスをアクティベーション
7. バックアップした .nupkg ファイルと設定内容をリストア
8. 動作確認

※ 切り戻しが発生しないように、クリティカルでない業務の自動化を実行している端末からバージョンアップして下さい。
※ 切り戻す前に、バージョンアップした製品に対してトラブルシュートを行い、問題の解決を試行頂くことをお勧めします。

その他の検討・検証項目

- ユーザーへの通知を準備
- Orchestrator 上のフォルダーについて
- その他の検討事項



ユーザーへの通知を準備

バージョンアップに係る内容で、ユーザーに通知する必要があるものを準備します。

カテゴリ	項目	例
使用方法の変更	Studio	<ul style="list-style-type: none">インストールとアクティベーションの手順パブリッシュの手順、Gitとの連携手順
	Activity	<ul style="list-style-type: none">新規追加もしくは機能強化されたアクティビティの使用ガイドライン
	Robot	<ul style="list-style-type: none">Assistantの新機能説明
	Orchestratorの使用法	<ul style="list-style-type: none">ログイン方法、ログイン先の URLリアルタイム監視機能説明スクリーンショットの自動レコーディング使用方法
バージョンアップのスケジュール	Orchestratorのバージョンアップ	<ul style="list-style-type: none">ログイン方法や運用手順が変化するため、予めユーザーにバージョンアップの実施日を連携
	Studio/Robotのバージョンアップ	<ul style="list-style-type: none">バージョンアップ後に何らかの問題が発生する可能性があるため、予めユーザーにバージョンアップの実施日を連携マシンによってバージョンアップの実施日が異なる場合は特に注意が必要

Orchestrator 上のフォルダーについて

クラシックフォルダーは廃止予定です。お使いの場合には、モダンフォルダーへの移行をご検討下さい。

Orchestrator 上のフォルダーには、クラシックフォルダーとモダンフォルダーがあります。

フォルダーの種別	クラシックフォルダー	モダンフォルダー
リリース時期	v2017.1	v2019.10
フォルダーの階層	なし	7階層まで可能
Robot の動的割り当て (任意のユーザー/マシンの組み合わせ)	手動で組み合わせを 構成することにより可能	自動で構成可能
使用上の制限	2022年10月に廃止予定	モダンフォルダー上のリソース（アセットやキューなど）を操作するアクティビティを使う場合には、System パッケージ19.10 以上が必要

この移行の手順については、下記を参照して下さい。

<https://docs.uipath.com/orchestrator/lang-ja/docs/migrating-from-classic-folders-to-modern-folders>

<https://www.uipath.com/ja/resources/knowledge-base/classic-folder-to-modern-folder>

その他の検討事項

その他のポイントを列挙します。これらの機能をご利用になる際には、お客様の環境で動作検証されることをお勧めします。

観点の例	例
ライセンスモデル	<ul style="list-style-type: none">製品のアクティベーションが意図通り実行可能かどうか検証・確認する。製品のバージョンによって、利用可能なライセンスモデルが変更されている。Robot に対しては 2018.3 から、Studio に対しては v2018.4 から、Orchestrator からライセンスをオンラインで付与することが可能となり、ローカルでのアクティベーションは不要。
Orchestrator ユーザー	<ul style="list-style-type: none">ユーザーの追加/削除のオペレーションが意図通り実行可能かどうか検証・確認する。Orchestrator のユーザーを、Active Directory からインポートすることが可能となった。Windows ログインによるシングルサインオンが可能となった。この機能を有効にすると、Orchestrator のログイン画面が自動でスキップされる。
ユーザーのロール設定	<ul style="list-style-type: none">オペレーションを意図通りに制御できるロール設定を検証・確認する。製品のバージョンによって、利用可能なロール設定が追加・詳細化されている場合があるため、バージョンアップのたびに検証を実施する。
パッケージソースのフィード設定	<ul style="list-style-type: none">インターネットへの接続がない環境においては、必要に応じて新しいバージョンのパッケージを Orchestrator のライブラリ用テナントフィードもしくは環境内に用意したフィードに配置する。
ガバナンス設定	<ul style="list-style-type: none">Automation Ops 機能により、ワークフローのアナライザーや、パッケージソースのフィード、インストール可能なパッケージのリストなどを設定して組織に強制できる。

補足: Robot/Studio の 安全なバージョンアップについて

Studioバージョンアップ後に既存プロセスが影響を受けない様に、製品の仕組みとして工夫をしております。ここでは、その仕組みについて説明します。

安全なバージョンアップのための、弊社の取り組み

UiPath 製品を安全にバージョンアップできるように、弊社は下記の実施体制を行っています。

- 各リリースにおいて、後方互換性を担保すべく十分なテストを実施
- 問題が発見された場合は、問題を解決した上でリリースを実施
- リリース前に検出できた互換性の問題点についてはリリースノートに記載
- リリース後に問題が発見された場合、マイナー/パッチバージョンのリリースにより速やかに対応*

* マイナー/パッチのリリースは、このバージョンがサポート期間内に限ります。

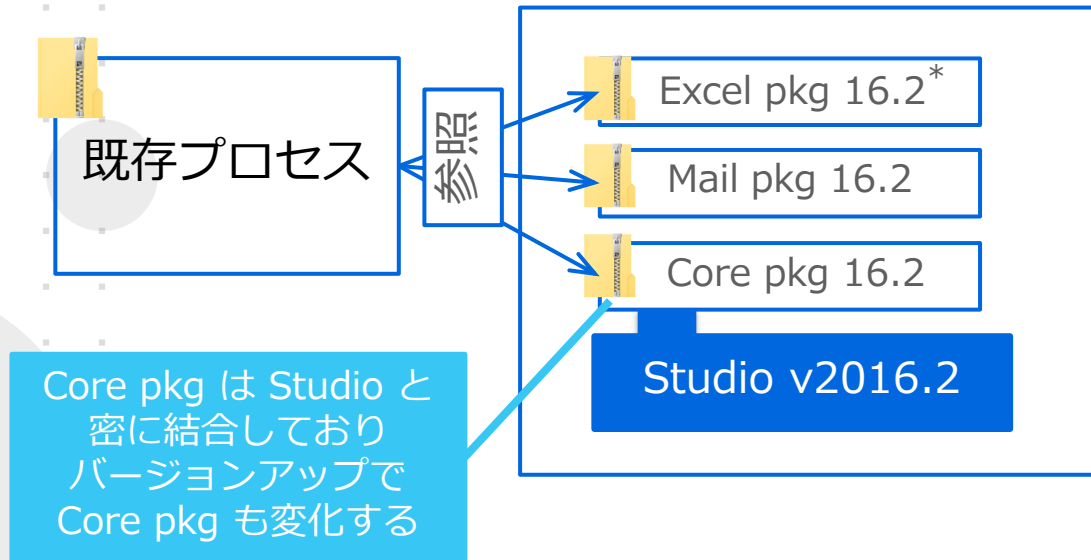
サポートが切れたバージョンに対しては、次のメジャーバージョンへのアップグレードによる対応となります。

* リリースノートは、次をご参照下さい。 <https://docs.uipath.com/releasesnotes/lang-ja>

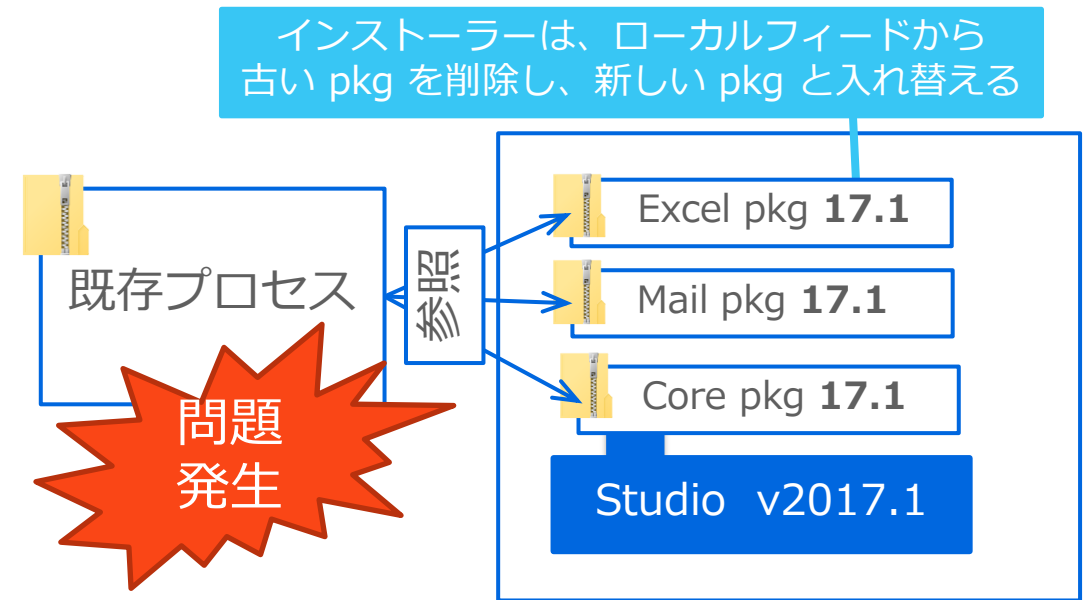
バージョンアップ後に、発生し得る問題

しかしながら Studio v2018.2 以前からのバージョンアップでは、既存のプロセスが動かなくなる可能性があります。

バージョンアップ前



バージョンアップ後



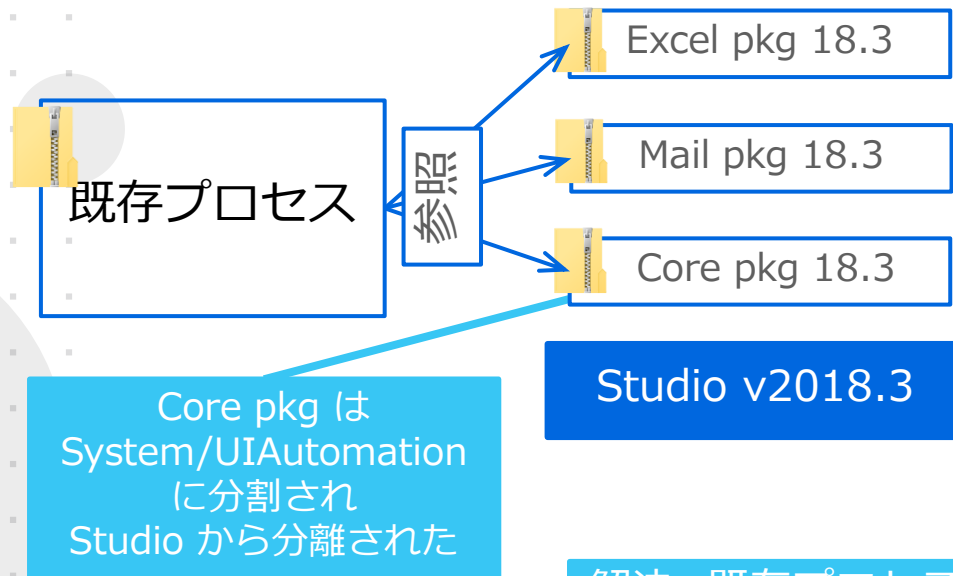
問題: プロセス実行時に参照する pkg のバージョンが変化するためプロセスの動作が変わってしまうことがある

* pkg は、パッケージを意味します。このバージョン番号は、便宜上製品本体と類似の番号を記載しています。実際は、各 pkg に固有の番号です。

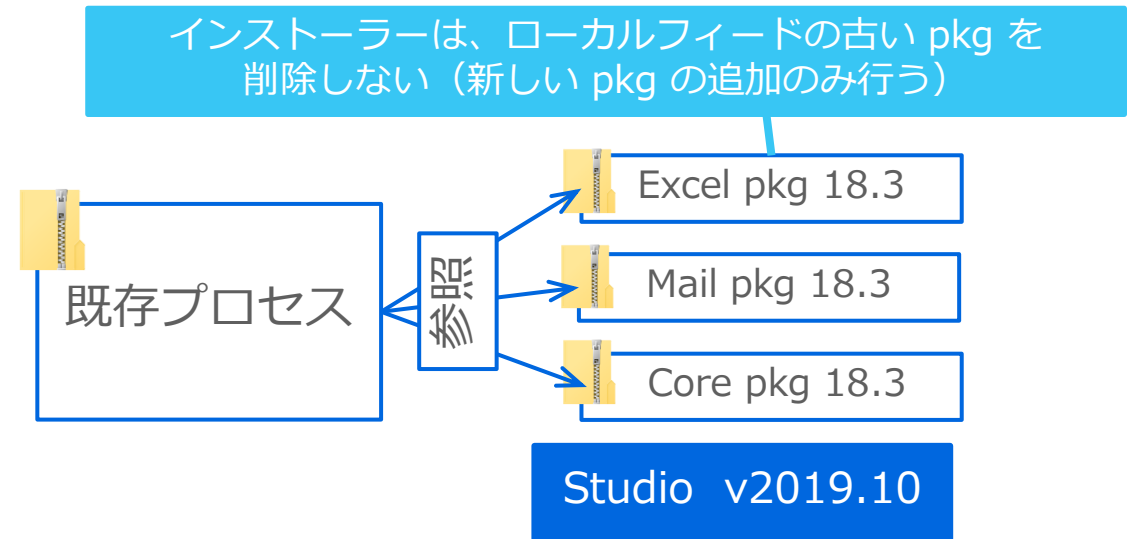
この問題を取り除く、弊社製品の機能

Studio v2018.3 から、プロジェクトごとに依存を管理できるようになったため、もはやこの問題は発生しません。

バージョンアップ前



バージョンアップ後



解決: 既存プロセス実行時に参照する pkg のバージョンが変化しないため、プロセスが安定して動作する (pkg のバージョンを更新することも可能だが、その場合は要テスト)
なお新規プロセスは、最新の pkg を使って作成することを推奨

安全なバージョンアップの為の実施計画

万が一の問題に対する備えとして、Systemパッケージを更新した際の動作確認や、クリティカルではないRobotからの段階的なバージョンアップをご検討下さい。

- 多数の Robot マシンを同時にバージョンアップすることは避けて下さい。
- クリティカルでないプロセスを実行している Robot マシンから、段階的にバージョンアップを実施して下さい。
- Robot のバージョンアップ直後は、プロセスの稼働に問題が出ないかをよく注視してください。
- クリティカルな業務を自動化するプロセスについては、バージョンアップ後も問題なく動作することを、事前にご検証頂くことを推奨します。
(検証用マシンをご用意頂き、リハーサルを実施してご確認下さい。)
- Orchestrator のクラシックフォルダーでアセット・キューなどOC機能を使用しているプロセスをモダンフォルダーに移行する際には、System パッケージへの依存を v2019.10 以降に更新して再パブリッシュする必要があります。再パブリッシュ後には、十分な動作検証を行って下さい。

<https://docs.uipath.com/orchestrator/lang-ja/docs/migrating-from-classic-folders-to-modern-folders>

